
 学 会 記 事

第7回新潟血液免疫学研究会

日 時 平成4年2月28日(金)
午後6時30分～8時30分
会 場 有壬記念館
2F 大会議室

I. 一 般 演 題

1) 悪性脳腫瘍患者末梢血リンパ球サブセット動態におよぼす集学的治療の影響

森 宏・田中 隆一
吉田 誠一・小野 晃嗣 (新潟大学脳研究所)
山中 龍也 (脳神経外科)

悪性脳腫瘍患者に対する集学的治療が細胞性免疫能に及ぼす影響を調べる目的で、治療前後に患者末梢血を採取し、リンパ球表面抗原の two-color 解析を行い、治療方法別に検討した。その結果、照射単独 (R) 群、化学療法併用 (A) 群および免疫療法併用 (I) 群のいずれでも治療経過と共に活性化 T 細胞が増加し、特にその主な構成成分は cytotoxic T 細胞であろうと思われた。また各群で NK 細胞は増加傾向を、B 細胞は低下傾向を示した事から、患者免疫能は細胞性免疫能が増強され、抗腫瘍免疫という観点からは有利な方向に動いている事が推察された。また Leu 3a⁺ 細胞が R 群、A 群で治療経過と共に低下したのに対し、I 群では逆に増加傾向を示し、Leu 2a⁺ 細胞は R 群、A 群でそれぞれ有意な増加を認めたのに対し、I 群ではほぼ一定の値を示した事から、I 群では CD4/CD8 比の低下が抑制され、患者免疫能はより有利な方向に動くものと推察された。

2) 自己免疫性血小板減少性紫斑病を合併し、肺の腫瘍病変を伴った CMMoL の 1 例

黒川 和泉・曾我 謙臣 (長岡赤十字病院)
藤原 正博 (内科)

症例：59歳女性。検診の胸部異常陰影で当科を受診、血小板減少症を合併した。末血所見は貧血なし、血小板数 1.1 万、白血球数 6,800、単球 34%、好中球 41% (形態異常あり)。骨髄は RAEB 類似の所見で芽球 5%、単球 8.8%、M/E=3.42 で CMMoL と診断した。さらに、PA・IgG は 300.0 と高値を示し血小板抗体の関与が示唆された。一方肺病変は多発性腫瘍病変であり、

CT、シンチ、ブロンコグラフィー、肺胞洗浄、他においても特別な所見は得られなかった。血小板減少症、肺病変はステロイド剤に反応しはぼ消失した。考察：MDS と ITP の合併、CMMoL の肺への浸潤が示唆される症例と考えられ報告した。

3) 悪性関節リウマチ、膀胱癌を合併した脾原発悪性リンパ腫の 1 例

高井 和江・真田 雅好 (新潟市民病院内科)
大西 洋司 (同 神経内科)
大沢 哲雄 (同 泌尿器科)
渋谷 宏行・岡崎 悦夫 (同 病理)

症例は64歳男性。1980年(57歳)慢性関節リウマチ(RA)と診断。1987年脾原発悪性リンパ腫(びまん性中細胞型, stage III)の診断で脾臓合併胃全摘術、術後 CHOP を10コース、M-COP を1コース施行(cyclophosphamide; CPM Σ 9g)。1989年3月より RA 悪化し、11月発熱、浮腫、末梢神経障害出現、腓腹神経生検にて結節性多発動脈炎型血管炎を認め、悪性関節リウマチと診断。prednisolone (PSL) と CPM による免疫抑制療法にて軽快した(CPM Σ 12.6g)。1990年12月血尿出現、膀胱癌(grade III, 移行上皮癌)にて4月膀胱全摘術施行、少量 PSL で経過観察中である。脾原発悪性リンパ腫自体まれであるが、RA と悪性リンパ腫との関連、CPM と膀胱癌との関連については文献的にも注目されており、興味ある症例と考え報告した。

4) いわゆる lethal midline granuloma の病像を呈した NK marker 陽性 T cell lymphoma の 1 例

中山 均・青木あずさ
五十川 修・帯刀 亘
小池 正・柴田 昭 (新潟大学第一内科)
江村 巖 (同 病理部)
福田 剛明 (同 第二病理)
藤原 浩 (同 皮膚科)

症例は23歳男性。右鼻翼の発赤、腫脹、壊死があり、いわゆる lethal midline granuloma の病像を呈した。病変部の HE 染色で、壊死組織の間隙に大型異型細胞の増生がみられ、免疫組織学的には、腫瘍細胞の表面形質は CD3, CD4, CD16, HLA-DR 陽性、CD4, CD8 陰性で NK マーカー陽性 T 細胞リンパ腫と診断された。病変は皮膚、皮下、筋層に及び、化学療法と放射線療法を併用するも、局所浸潤を繰り返し、治療抵抗性である。近年、狭義の進行性鼻壊疽は、その大半が T cell

lymphoma と報告され、さらに NK マーカーが陽性であるとの報告も見られる、本例もこれに一致し、興味深い1例と考えられた。

II. 特別講演

「悪性リンパ腫の診療の現況」

三重大学医学部第二内科

白川 茂 先生

第24回新潟救急医学会

日時 平成4年7月18日(土)

午後2時～

会場 新潟大学医学部 大講堂

I. 一般演題

1) 新潟市内における消化性潰瘍穿孔例の実態と大網充填術の成績

中村 茂樹・田宮 洋一
松尾 仁之・佐藤 賢治
島影 尚弘・小野 一之
武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

【目的】H₂ blocker (HB) による消化性潰瘍手術の変化を明かにし、穿孔性十二指腸潰瘍 (PDU) に対する大網充填術の再発率を評価する。【対象と方法】1976年から1991年までの新潟市内における消化性潰瘍手術症例を、年次別に検討した。また PDU に対する大網充填術施行症例の再発率を、HB 服用状況と潰瘍歴の有無により検討した。【結果】難治性潰瘍の手術例は、1982年の HB 発売を境に激減し、1991年は人口50万人中3例だった。これに対し合併症性潰瘍のうち、出血例は漸減傾向にあるが、穿孔例と狭窄例は減少傾向がみられなかったが、穿孔例と狭窄例は減少傾向がみられなかった(1991年度はそれぞれ4, 35, 5例)。1991年の PDU 26例に対する治療法は、胃切除が66%に対して大網充填と吸引療法が計34%で、胃温存術式が増えていることをうかがわせた。潰瘍歴のある群とない群の再発率は、HB 投与継続例ではともに0%、投与中止例ではそれぞれ60, 29%で、文献的な単純閉鎖術の再発率と変わりなかった。【結語】消化性潰瘍手術症例は、HB の登場により激減した。大網充填で十二指腸潰瘍の再発率を下げることはできなかった。

2) 冠動脈内血栓溶解療法における各種血栓溶解剤の再開通率について

畠野 達郎・政二 文明 (桑名病院循環器科)
渡辺 賢一 (燕労災病院 循環器科)
鈴木 薫 (県立新発田病院 内科)

当院で1988年～1992年6月までの急性心筋梗塞患者に対して施行した冠動脈血栓溶解療法および組織プラスミノゲンアクチベータ製剤(以下 TPA)の末梢静脈投与の効果を検討した。発症12時間以内に冠動脈造影を施行した50例のうち14例が経静脈 TPA 製剤を投与した群、36例が TPA の静脈投与をしなかった群であった。静脈投与ありの群では最終的には13例92%で再開通。TPA 静脈投与なしの群では28例78%で再開通を認めた。冠動脈血栓溶解療法前に TPA の静脈投与を行った方が再開通率が有意に高かった。冠動脈血栓溶解療法に用いたウロキナーゼ、TPA 製剤の効果は現在までの経験では有意差がなかった。

3) 当院における DOA の実態調査

山上由美子・五十嵐光子
梅澤 祐子・高橋 智子
小林 裕子・角田菜穂子 (燕労災病院外来)
吉田奈津子・平方 静子 (看護婦)
瀧澤 淳・大島 満
渡辺 賢一 (同 循環器内科)

【目的】地域および当院の救急医療の現状を把握するため、過去3年間の当院における DOA 症例について、その実態を調査した。【対象・方法】1989年1月～1992年3月までの間に当院に搬入された DOA 症例を対象とし、必要項目について情報収集し、得られた結果を表およびグラフ化し統計処理した。【結果】過去3年3ヶ月間に当院に搬入された DOA 症例数は111例で、死因別にみると、内因死74例・外因死37例であり、内因死では、心疾患が47例(65%)と最も多く、外因死では外傷が18例(49%)と多かった。来院前に一次救命処置が行われていた例は49例であり、全例が救急隊員によって行われていた。内因死とそれに関連していると思われる既往疾患の関係をみると、高血圧症を既往に持つ症例が多かった。【考察・結論】DOA 症例の救命率向上のためには、救急体制の早急なシステム化の実施と慢性疾患を持っている患者・家族への働きかけが必要である。